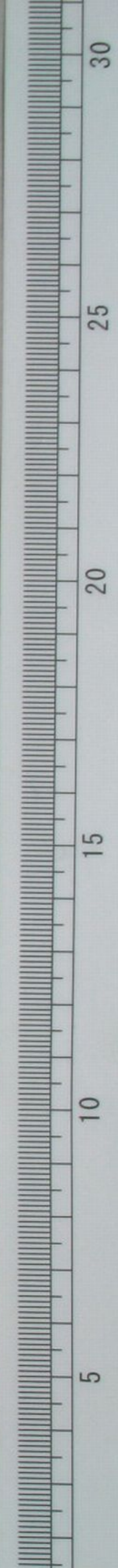


特別
14
1919
76





多
精
廣
雅
錄

七

のまゝに長日勤行をなさるるも法華經を讀
讀四家のあまは轉後して又此の大師を勝
長壽院といひ二階を永福寺といひ法華寺を五
大寺のあまは顯名はのあ院といふこと
いと古徳といふも三代のあまは佛を
是のあまは此のあまは法華のあまは念
佛のあまは念の文をさすこととさす九條
家と餘のあまはのあまは因のあまは
あまは一とさすこととさすのあまは念の
のあまは念のあまは念のあまは念の
念のあまは念のあまは念のあまは念の

法華經

いん部をさす行のあまは念のあまは念の
のあまは念のあまは念のあまは念の
形をさすこととさすのあまは念のあまは念の
一のあまは念のあまは念のあまは念の
止るあまは念のあまは念のあまは念の
興のあまは念のあまは念のあまは念の
こととさすのあまは念のあまは念のあまは念の
のあまは念のあまは念のあまは念のあまは念の
のあまは念のあまは念のあまは念のあまは念の
念佛のあまは念のあまは念のあまは念のあまは念の
の本をさすのあまは念のあまは念のあまは念の

ので、今申すやうな詩趣の深い場所であつたものですから、此際一篇の詩なかる可けんやといふやうなことで、一番能々の小村君が筆を執つて、環状の歌と文とを作りました。随分ソレがよく出来たので一時佛國在留の日本人中に、大變評判が宜かつたやうです。外國に居りますとこんなことでも餘程愉快に感ずるもので……(談話は

同じ佛書意のそを那翁の書取
るましの流うちうち、私人は
其存のそをいつうそを指し
てまき

文士畫家の素人神樂

麴町四番町に住む畫伯武内桂舟子の庭に枳ち果てた一つの小ひさな祠があつて福を荷と云ひ傳へて居る、何時頃何人が何處から何神を勧請したのか藤張解らぬのだが、先頃ある新聞が神佛信者の投票とかいふものを募集した時、誰か戯れにこの福々稻荷を投票した事がある、元より一票か二票かで、人の目と惹く程で無かつたが、桂舟子の友人二三子これを聞いて大に面白がり、一番社殿造營の趣向を立て、桂舟子を驚かして呉りやうと、種々工風を凝して神木を寄附するものもあり、瑞垣を圍へる

ものもあつたが、神田の要屋の清水晴風氏に頼んで一尺四方ばかりの春日の丹敷殿と造つて遊ぎ込んだ、すると山の手談話會といふ團體の人々、道まゝ石を奉納する事に定めて、昨日の正午頃まで大低出来上つた、併し桂舟子の庭のさう廣くない事、事狭隘いと言つてよい方だから、道まゝ石へんまゝかには是より何丁とも、刻めな、第一誠の道の神表に嘘八百の禁物だから、矢張り有体に記付る方がよからうといふので、測量の上刻んだ文字「從是南へ六尺、福々稻荷云々」であつた、荷鳥居其外の寄附者もあるとの事で、急よ竣工の上の

▲奈破翁の空中樓閣 此種巴里に於て博覽會の建物を取毀中一の興味あること發見せられたり、奈破翁一世が全世界を服従し得たるまき羅馬帝として居住せんため建築せんとしたる宮殿の基礎トロカテロの近傍に發見せられたることなり此宮殿の設計は露國のクレムリン宮に似て之よりも廣大に且つ壯麗なるものにして皇族の各員は別々に完備したる且つ驕奢を盡したる宮殿を有し又別に文學上及び理學上の參考品を供へたる多くの室を有し今のアローヌ公園は宮殿の一部を築きたるのみにて奈破翁の運命は顛覆し巴里は非常なる紛亂を極むるに至り其後平和の代となりしも此基礎の事は全く世人に忘れられ幾多の變遷を経て今日に至るまで放棄せられ居たるなり今此發見に依り巴里の人士は再び奈破翁の當時を追想するに至れり云々

東洋製

●田中正造氏議員を辭す 下院第一の名物男たる栃木縣選出議員田中正造氏は昨日辭表を提出したり

●栃鎮主張を徹す 例の足尾銅山鑛毒地が自家の選舉區たるの故を以て鑛毒問題を絶叫すとは選挙の世卑劣の人心には有り勝ちの想像なり是れ容易ならざる一大問題を區別たる田中正造が議席の得喪に關聯する者とし時に社會の視聽を鈍らすことあるのみならず會主義の士起ちて其救護に任せんとするも自己あるを以ての故に退ふること能はざるかの感あり嗚呼吾れ衆議院議員を辭して院外別に大に心身を致し院内のことはこれを他の義人に托せんとは栃鎮年來の主眼なりしが別項の如く彼は昨日を以て遂に栃木第三區選出の代議士を辭す議長慰諭して留任を勧告するも彼れ前言を執て聽かず國會開會以來の下院の一名物今や永く渡良瀬河畔に隠る

●喜多川と奥と交代の内情 京都進歩黨の代議士喜多川孝經が辭職して其代りに政友會の奥繁三郎を出す事になりたる由に既に記載したる通りなるが、今其内情を聞くに喜多川の投機に失敗して山城起業銀行の支配人と結託し同行名義の手形を偽造して一時を占めたりしたる金額二万圓に達し同行頭取より(奥等一味の辯護士の手により)私

書偽造の告訴を起されんとするに至り、四苦八苦の末、終に政敵たる奥に泣付きて仲裁を頼み、其代り自分の代議士を辭して其跡に奥を推薦すべしとの約束を結びたる次第なり、然るに喜多川の今年の歳費の已に差押へられ居る事なれば愈よ辭職の曉に其方の始末を附けざるべうらざる困難あり又奥の方にも川越銀行の破産に關し其頭取を北海道に逃さんとの入智恵をなしたりとて不評判もある際なれば、彼是にて双方隣隣し居る有様なりとぞ

新しき人々もあまき
破りもあまき雨あまき
七あまき又あまき
七あまき十月あまき
七あまき
了

つれづれしくの海辺のありし由子を今も各所の陶
 の元本の... 勿論といふもむきまのまは破片
 の破片を備き方々をえとあつてもあるが、一少
 さくあき仕ひりたる果て入して津山に集めれ
 のを考ふることを出しぬてあつたとする中、い
 ちふにこのまゝの向かい宛をみるに、
 又年々と出まるともあつたといふ、破片を
 心懸け身してを隠す様々といふもあつた、
 七兄弟とをえとあつた、此の昔のあつた
 のいふ、又あつたといふ、
 益しむるあつた、
 出た人と誰かとあつた

紙様複製

○宮古の
 終

徳田力花のつらつら、
 行してあつた終つたあつた、
 二一、
 と此し手もあつた、
 加賀のあつた、
 又りげんのあつた、
 る包まぬあつた、
 をあつた、
 め仲割のあつた、
 比日あつた、
 ちあつた

○書道(向帖)

書をニシテ意味をわくの法を多用するは西家より
る。○おいら前の冬はかま掛ひも掛つて天を澄
らしてまじりて五午の陽をまよす事ふ出てを
つら五午の陽を清き乾の向帖にあらつて吾も
いこうとまあふ。○臨海流法書のあらも(む)むとあつて
○軍の清神丹書の裸體画と此は書社座の
足指の觸れ膝のつた入向の中を澄みふ事を今も
えをう清神の流し。○自ら言ふの鳴呼々
おいらも古も困難むも巧拙のあらもその腕部
の関節を力を用ひ結りひあふ。○肝腎系を
あく首帯を結く。○とこボシとるつらむ。○おいらも

○裸體画

○支那の銅

肝腎のたぐひ力を入るは巧く書いたまはる。○
んたのちもたれま。○支那の派をとりんは獨
逸の技あり。○本國の古く精進の肉子二千年
間母身やく供役ま。○此の銅が一者の中にあ
る。○ちりてあふ。○まのあし。○ち名流の技
ひまあふ。○ち。○支那の古くは地ちる。○
○とる。○ち。○此の技も七全
とる。○支那をう。○河村瑞賢の碑
う。○此の碑も七全とる。○とる。○
瑞賢も古くは。○子。○何の
何れ。○ち。○此。○名流。○何とる

○河村瑞賢碑

誇るがもんの事いふは、〇残飯の行衛
 此の残飯の行衛を言致まじに、おや、あつたの
 面をうい、まゝをゆめ、たけ、軍家の教式、
 人波、おりの口、をのを、刺すところの、飯、と、まゝ、
 夥しいものを、馬、を、積、んで、
 中士の山を、飯、粒、を、と、り、
 あつた、と、その、ま、持、ち、
 ち、う、火、を、及、と、ま、
 寒、の、つ、る、と、出、身、が、
 時、葉、あ、の、と、ま、ま、
 ま、い、く、ま、く、の、人、
 降、ま、せ、
 権、海、や、ま

入つて、蛇、を、と、り、
 残飯、を、
 ち、う、ま、ま、
 己、
 本、
 の、
 又、
 け、

○縁日商人

わろくともうし一晩だけ書きあふ受せん一
ふせけしをまた煎らんと名をつけしこが即ち鉛
物と呼ばるる葉子の原料をあらうん也くは
く此原料をにうと扱おるいも悉記とぬるを
葉子を舌を出して受の○縁日商人 受お
て取スカンテラ一個とつあ申す道且て受
持らす天下の大名、店を張る縁日商人を
今のゆかり判をい北月(十月)一杯と銘を張つ
こもさうびのさの一廻をきいてさういさうは
のへまうの風俗をむる○とすけともさすび
さうくと、相伝る商人の現今の能事を細お

せん先づ(一)小物、(二)三寸(三)ころび(四)ぼ
(五)引込の五粒とさる、小物と名付の大名を
さし扱てさういさうの能事をさう扱を
とくさの能事をさういさうの能事をさう扱
ひさうの能事をさういさうの能事をさう扱
ゆり減しを行く有能いさう、夫、うう三寸と名付
とるさうの能事をさういさうの能事をさう扱
とくさの能事をさういさうの能事をさう扱
小物と三寸と名付しやうと扱ひさういさう
脈と名付しをさういさうの能事をさう扱
さういさうの能事をさういさうの能事をさう扱

をゴロウと稱へて彼等の潜りを制服する唯一の方法として居る、夫で清かと思ふと今度はまだ手打と稱して、其晩に汗水漬して稼いだ質上金を、寄て群つて飲倒すやうな酷いことをするが、強情で轉ひなごの店を張らうとする、大概先づ斯んな目に逢つて一遍で肝を潰し、機に親分株を探し廻るやうな事が出来る

轉ひ仲間の中に小供一點張のものがあつて、随分手酷い欺瞞を遣つて居るが、其のうちにも砂糖菓子や鯛や海老をかけて居る吹矢といふものがある、此の吹矢は幾分か怒すべき點もあるが、同じ種類のドッコイ／＼だの、またチッコイ／＼だのといふもの、所謂やらす打たくりのもので此等小僧のみでなく、中僧大僧連を引かけて巧に財布の底をはたかせて居る
此の外にもまだ紙切といふものがある、矢張り欺瞞師の一種だが、之は剃刀一挺の仕事で、別に種も仕掛もないやうに思はれるが、中々さうでない、併でこの欺瞞の皮を剥て見ると、吹矢の別の的や矢の方に仕掛のないが、的の廻し方にたゞ幾分か手こまるのある丈である、夫からドッコイ／＼の鯛や海老のかゝつて居る平面の筋や、また振の鯛

先なごに仕掛のないが、其の臺の下にの鏡といふいかさまがあつて、振の鏡先が盲く大きな鯛の所へ止りかけると、膝で鏡の加減をするから、客のハラ／＼して居る間に、鯛先の隣の一厘菓子へ行て止つてしまふ

客の方も斯うなると思ふ敷なり、また一つに僅かの所で隣の筋へ外れたのだから、今度の一舉に大鯛をせしめやうとの意が出て、再び調子を付けてるりと廻すと、今度の大鯛の所へ過去つて海老の當りで止つてしまふ、扱斯うなると客の方も熱くなつて、何うしても鯛を取らねば一分相た、ぬといふ意氣込みになるが、欺瞞屋の方で之れが附目で、散々一厘菓子を積ませた上、客のペツをかくを機會に情の鯛を當らせて遣る
ドッコイ／＼の斯くの如き信むべき手段を以て、無邪氣なる小僧中僧の鼻口をはたかせて居たが、其の上を行くのハチッコイ／＼と云ふ至つて手酷い欺瞞で、此方ハチッコイ／＼も煙草入だとか、或ハチッコイ／＼紙入だとかいふ少し纏つたものだから、相手も中僧大僧に限つて居る、其の巧みに客の金を捲上げる手段といふハ、たつた五本の金串を指頭でこ

東横屋

をかすのだが、之は頗る手練を要する事で、此れまでに斯道の強ものと呼ばれたものハ、漸く一二人しか無かつたこの事である
五本の金串ハ十分油で磨き立て、あつて、其のうち一本に煙草入だとか紙入をふら下げて「サア五本の中の此の棒ですよ、よく見當を付けてお引なさい、ソレチッコイ／＼チッコイ／＼と指先で緩やかに客の方に向て金串の先を互ひ違ひにする併で客ハ、試に覺のしたのを引で見ると、煙草入が附着て居るから愈がムラ／＼と起つて、今度ハ緩をかけて引く氣になる

ツギモノの中にハまだ此外に、何十種となく變つたものがある、夫から時侯によつて、折々新らしいものが現はれるが、何うも二年と續いて出るものはない、最も氷饅頭のやうなもの、數年前にハ盛んに商なつたものだが、例の一杯五厘のアイスクリームに押されるやうな始末になつて、夫からまた今年になつて徐々頭を持ち上げ出したが、小供の以前からあつたことを知らず答もないから

珍らしく思つて其の店へ集まつて来る
此等ハツギモノの中でも先づ際物の方だから、何うせ永積のあらう譯もないが、小供なごの爲を思へば、斯ういふものハ一日も速かに絶滅させたいものである、彼また曰く「アイスクリームも悪いに違ひありませんが、氷饅頭なんでものハ、以前のいかさ氷を使つたもので在ります、いかさ氷といふ水が悪かつたり何かして、吊川沖へ捨られてしまふ氷なんですよ

現今ハ中々検査が嚴しう在りますから、萬々ソンのものを使へやう道理ハ有りませんが、その欺瞞屋の事ですから中々安心ハ出来ませんが、また水ばかりなら好う在りますが、色素が例の大ラ／＼だの何だのですから、至つて危険なもので在りますよ、そこへ行きますとアイスクリームのハ、何んや悪い氷を使つたつて、鏡の外ですから何でもありません、ソレに此方ハ着色が流行らなくなつて、近頃餘り用ひなくなりましたが、薩島林だけハ矢張使つてゐるやうで在ります
私しも随分縁日商賣にハ、種々のものへ首を突込

んで見ました、此のツギモノの欺瞞、人体に害を興へるものから至つて罪なもので、考へて見ると恐ろしいもので在ります」と自白した、仍て何も罪滅しなれば、知つたことの欺瞞種々、幾らでも打明くべしと、彼の愈々乗地になつた「おでん屋ですか、たりやア中々種類が在ります、湯目へ出るものが悉皆いかさま屋かと云へば、決してソウいふ譯ぢやア在りません、夫に此の方へ欺瞞と云つたつて、人体に害を來すといふ程の事へありません、品物だつて蒔絵だの唐の芋に仕掛へありませんが、たゞ、マレに細工があるばかりで在ります、其の細工と云ふのは、正真正の醤油だの、マシを使はないで、料理屋のお餘などを集めて來て、之を打込むので在ります。

叩き屋の辯舌の上に調子といふ事が一番大切であつて、何程客を誘き寄せた所が、向ふから手を出せるやうな調子に持て行かなければ仕方がない、此の叩き屋の瀬戸物店も、始つたつた一人しかなかつたものだが段々同類が殖て來て、今で五六

人の顔を見るやうになつた「全く近來殖ましたよ併し最初の發明者といふも可笑しう在ります、之を考へ出した者へ、今顔を出さないやうな事になりましたよ

賣る品ですか、ソレ無論眞面目のものぢやア在りません、算りにも貴公分つて居りますよ、大概普通の店の半價段ですもの、眞面目の品が斯んなに廉く賣れて堪るものぢやア在りません、ソコに曰くがなかつて何うなるもので在りませう、之の瀬戸物のことを云ふのですが、石鹼など、來たら一函三箇入のものが五函もあつて、八錢か十錢で賣るのですから、斯の品が何なんものだといふ事へ、テンからモウ分つて居るぢやア在りませんか併し人間といふものゝ慾ですからね、一寸見てくれの好いものへ、心が傾きやすくなる譯で在ります、夫にマシと調子が旨いから、ツイ客も釣込まれるやうな事になります、兎に角瀬戸物と石鹼で、どちらが罪が輕いかと言ひますれば、先づ幾分か瀬戸物を賣る方が輕からうと思ひます、其の譯へなればマシの瀬戸物だつて、使つて使へないやうなものゝ賣る譯が在りません、所が石鹼と來た日にやア、全然使ふ事も何も出來ない品だ

東洋風

から酷う在りますよ
此の瀬戸物を賣る人間の、轉び仲間の中でも少し毛色の變つた方として、元來この仲間の生援さといふ譯でもなく、全く瀬戸物に就ては目の明て居る本職もの、未で在ります、夫に言葉も尾張辯な邊を使つて購着て居ますが、實ハアな事をしなくつても好いので在りますよ、また後から出るものも、言葉に訛を付けないで、妙でないといふので、同じやうに甘つたる事を言つてゐるのでせうが、考へて見れば馬鹿々々しい事では在りません瀬戸物の仕入へ大概靈岸島か大川端からマシを買て來るので在ります、マシといふ退物の事を申し、併し退物といつても確があつたり何かするやうなもの有りません、壁へハ釉の出やうが悪いとか、また形が面白くないとかいふやうなものですから、素人目には一寸これに分りません

叩き屋の縁目商人 (十七)

叩き屋の縁目商人に違ひないが、普通の商人から買つた品と比べて見れば、釉の加工合から其の焼き方にまで變つた所がある「叩き屋が賣つて居る品

をよく考へなさい、形なんてものゝ崩れをいつて居るひよいものですよ、ソレに描畫だなんて言つて居ますが、之も大概の押畫の形ものです、何といつたつて小皿一枚一錢位の賣るのですから、能いもの、賣れやう道理に在りません
夫に客の前で薬を解て直ぐ品を出しますから、買ふ方も大層心持が好う在ります、中には着た荷を直に持て來たなど、吹く者が有りますが、之のみんな崩れものばかりを撰援て、また一荷に造り直したのを持て出るので在ります、客の方のソんな事を知らないから、同じ品なら改めずとも差支へない、薬に包んだ儘で好いと云つて、持て歸る人があります、扱家へ歸つて調べて見ると、形が崩れて居たり、また書が半分しかないやうなものがあるのです、夫だから何うしても改めずに買へない品で在ります
これで叩きの瀬戸物の方へまだ罪が輕う在ります、石鹼と來た日にやア理屈に在りません、石鹼の中で一番下等のものを洗濯石鹼として有ります、此の叩きの石鹼は洗濯に使ふ事も出來ないものですから、實にひよいもので在ります、夫です

からお値段にした所で、叩きの石鹼三箇と洗濯一
 箇位の割になるので在ります
 話をお聞になつたら成程と珍合點が参りませう、
 一体叩きの品の悪いに違ひないが、夫でも石鹼に
 は相違ないので在ります、また製造法の何うであ
 るかと申しますと、之の数年棚酒しになつて居た
 仕方のない品を集めて来て、其を土臺とするので
 すが、早く申上げれば其の棚酒しの中へ、層を殖
 す安機のやうなものを無暗に打込んで、煮直して
 仕舞ふので在ります
 夫から型へ注込んで三個づ、函別にしませんが、普
 通に賣つた時に、中々其の函代にも押付させ
 んから、種々な印の付た古函を集めて来て押込み
 ます、其ですから函の印だとか通印だとか違つ
 て居ますが、中味は皆な同しなから可笑しう在
 います、仍で品の煮返しものですか、型へ入れ
 たつて何だつて固まる譯がありません、強く指で
 押して御覧じろ、ブツリと孔が穿くほどの品です
 の、使はうものなら一度でグツ／＼に解てしまひ
 ますよ

おでん屋の欺瞞手段といふの、たゞメレに細工を
 するばかりであつて、其のメレの細工も料理屋だ
 とか軍鶏屋とかいふ所の、お餅を入れるに過な
 いのだから、却つて滋養分も含んで居て、また味
 も美しいに違ひないが、其の不潔なことの話を聞て
 も胸が悪くなる程である『何うせ貴公料理屋など
 のお餅ですもの、塵芥の入ることへ一通ちやア
 有りません、夫に巻煙草の吹殻だとか、藝者の顔
 に見とれて洗した涎などが皆この中に入つて居る
 んですから、堪るもんぢやア有りませぬ
 夫に軍鶏屋や牛屋のものと来ちやア尚ほ地りませ
 ん、最も此の方のメレの重に外へ廻りますから、
 餘り澤山打込むやうなことに有りませぬが、何に
 してもおでん屋の欺瞞店と来ちやア、先づ掃溜と
 いふより外へなからうと思ひます、夫に夏場など
 と来ちやア随分腐敗の虞が有りますから、至つて
 危険なもので在りますよ、またおでん屋に就ては
 種々お話も有りますが、大概此邊で切上げて置い
 て、今度の叩きのことを少し申上げて見ませう』
 叩き店といふ此も轉びの一種で、マンカを用ひて客
 を欺すと云ふ、至つて邊の好い欺瞞屋である

櫻橋屋製

『現今の所で叩き店といへば、先づ瀬戸物屋と石
 鹼賣、夫から巻煙草屋位のものでせう、最も瀬
 戸物屋と石鹼賣の小物や三寸の方にも有りますが
 之の價格も高くつて欺瞞もので在りませぬ、併
 し何といつても縁日ものですか、品の悪いの
 極つて居ることで、店へ行つてお買になる考へだ
 と間違ひますよ
 仍で此の叩き屋の服装が好う在ります、寒の中
 も襦袢一枚に向ふ鉢巻で菓の裡へ大胡坐を引掻き
 ながら、例の叩きを遣つて居ますが、其の文句が
 可笑しう在ります、サア／＼買はぬか／＼、廉い
 ぞ／＼、斯んな描畫の好い茶碗が十人前揃つて居
 る、十箇で二十錢かイヤ十八錢、エ、十四錢……
 十錢に負けてしまへど云つて手を拍ちますが、斯
 れのモウ最初から十錢に極つて居るのを、高く切
 出して置いて段々下るので在ります
 夫から石鹼の叩きも同じ様な持て行き方ですが、
 服装の瀬戸物屋との違つて、何々石鹼會社といふ
 やうな印半天を着て、前へ叩き袋を出して鏡舌り
 立てますが、之の中々辯舌と調子が好なければ、
 旨い商賣の出来ないから、逆も斷出しなどの遣れ
 る仕事で在りませぬ

叩き屋の欺瞞手段といふの、たゞメレに細工を
 するばかりであつて、其のメレの細工も料理屋だ
 とか軍鶏屋とかいふ所の、お餅を入れるに過な
 いのだから、却つて滋養分も含んで居て、また味
 も美しいに違ひないが、其の不潔なことの話を聞て
 も胸が悪くなる程である『何うせ貴公料理屋など
 のお餅ですもの、塵芥の入ることへ一通ちやア
 有りません、夫に巻煙草の吹殻だとか、藝者の顔
 に見とれて洗した涎などが皆この中に入つて居る
 んですから、堪るもんぢやア有りませぬ
 夫に軍鶏屋や牛屋のものと来ちやア尚ほ地りませ
 ん、最も此の方のメレの重に外へ廻りますから、
 餘り澤山打込むやうなことに有りませぬが、何に
 してもおでん屋の欺瞞店と来ちやア、先づ掃溜と
 いふより外へなからうと思ひます、夫に夏場など
 と来ちやア随分腐敗の虞が有りますから、至つて
 危険なもので在りますよ、またおでん屋に就ては
 種々お話も有りますが、大概此邊で切上げて置い
 て、今度の叩きのことを少し申上げて見ませう』
 叩き店といふ此も轉びの一種で、マンカを用ひて客
 を欺すと云ふ、至つて邊の好い欺瞞屋である

はるの陰の枝みうもくもくを海母の古古持の
吾のうをそむくは海母の古古持の
④日とそその海母の古古持の
まけんは海母の古古持の
十月廿九日

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

東
林
藏

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

東洋製

東京
製

癸卯年十月六日

楊公山社

李煥初書

